

## 審査意見への対応を記載した書類（6月）

（目次） 国際教養学研究科 国際教養学専攻（M）

1. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）の「1（4）イ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」において、「国際教養学における知とは、分野横断・学際的な教養学で修得する知とグローバル化とその課題に対する専門分野の知を統合した多層的かつ多元的な知である」と示されている。しかしながら、「グローバル化とその課題に対する専門分野の知」の指す「専門分野」の具体的な内容については、設置の趣旨等を記載した書類（本文）P. 7の「③専門的知識：グローバルコミュニケーション研究領域」において、「グローバルコミュニケーションの学際的な知見に基づき主体的に判断し、グローバルな課題解決に必要な高度な専門知識」という説明のみであり、本専攻で学ぶ国際教養学における具体的な専門分野がどのような分野のどのような能力であるかが判然としない。このため、「分野横断・学際的な教養学で修得する知」の指す「教養学」との差異も判然としないことから、本学の掲げるディプロマ・ポリシーの妥当性を判断することができない。このため、本専攻が「1（4）イ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」において掲げる「国際教養学における知」や、設置の趣旨等を記載した書類（本文）P. 7の「③専門的知識：グローバルコミュニケーション研究領域」において掲げている「グローバルな課題解決に必要な高度な専門知識」とはどのような能力であるかについて、教養学との差異を明確にした上で、具体的に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。その際、養成する人材像とディプロマ・ポリシーの整合性についても、明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。（是正事項）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
2. 審査意見1のとおり、ディプロマ・ポリシーの妥当性を判断することができないため、示されたカリキュラム・ポリシーが妥当なものであるのか判断することができない。このため、審査意見1の対応を踏まえ、養成する人材像及びディプロマ・ポリシーに整合したカリキュラム・ポリシーが適切に設定されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。（是正事項）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 1
3. 審査意見2のとおり、本専攻が掲げるカリキュラム・ポリシーの妥当性に疑義があるため、適切な教育課程が編成されているか判断することができない。このため、審査意見1及び2の対応を踏まえた上で、適切な教育課程が編成されていることを明確にするるとともに、必要に応じて適切に改めること。（是正事項）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 4
4. 設置の趣旨等を記載した書類（本文）の「(3) 教育課程の編成と授業科目への展開」において、「主として英語で講義を行う授業科目は、名称を英語表記とし、日本語表記を付記している。」と説明がなされているが、シラバスにおいて、授業内で使用する言語及び定期試験・レポートで使用する言語についての説明が見受けられず判然としない。「主として英語で講義を行う」とは授業において具体的に何を英語で行うかについて説明するとともに、学生が十分理解して履修を選択できるよう適切に改めること。（改善事項）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 6
5. 教員資格審査において、「不可」や「保留」、「適格な職位・区分であれば可」となった授業科

目について、当該授業科目を担当する教員を専任教員以外の教員で補充する場合には、当該授業科目の教育課程における位置付け等を明確にした上で、当該教員を後任として補充することの妥当性について説明すること。(是正事項) . . . . . 28

6. 改正前の大学設置基準第36条第1項で定める、専用の設備を備えた校舎を有するものとされる「学長室」について、校舎図面では備え付けられていることが確認できないことから、「学長室」が本学に備えられていることについて明確に説明するとともに、適切に改めること。ただし、特別の事情があり、かつ教育研究に支障がないと判断する場合には、当該事情や判断理由について説明すること。(是正事項) . . . . . 30

7. 本学の学則において、学校教育法施行規則第4条第1項第3号に規定する「授業日時数」について記載が見受けられないことから、適切に改めること。(是正事項) . . . . . 31

(是正事項) 国際教養学研究科 国際教養学専攻 (M)

1. 設置の趣旨等を記載した書類(本文)の「1(4)イ 学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)」において、「国際教養学における知とは、分野横断・学際的な教養学で修得する知とグローバル化とその課題に対する専門分野の知を統合した多層的かつ多元的な知である」と示されている。しかしながら、「グローバル化とその課題に対する専門分野の知」の指す「専門分野」の具体的な内容については、設置の趣旨等を記載した書類(本文)P.7の「③専門的知識：グローバルコミュニケーション研究領域」において、「グローバルコミュニケーションの学際的な知見に基づき主体的に判断し、グローバルな課題解決に必要な高度な専門知識」という説明のみであり、本専攻で学ぶ国際教養学における具体的な専門分野がどのような分野のどのような能力であるかが判然としない。このため、「分野横断・学際的な教養学で修得する知」の指す「教養学」との差異も判然としないことから、本学の掲げるディプロマ・ポリシーの妥当性を判断することができない。このため、本専攻が「1(4)イ 学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)」において掲げる「国際教養学における知」や、設置の趣旨等を記載した書類(本文)P.7の「③専門的知識：グローバルコミュニケーション研究領域」において掲げている「グローバルな課題解決に必要な高度な専門知識」とはどのような能力であるかについて、教養学との差異を明確にした上で、具体的に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。その際、養成する人材像とディプロマ・ポリシーの整合性についても、明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

(1) 養成する人材像

「国際教養学における知」とは、「画一化・規格化された専門分野の知ではなく、分野横断・学際的な専門分野の知を統合した多層的かつ多元的な知」を指し、養成する人材は、「グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養、『文系』と『理系』の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力」を持つ。

一方で「③専門的知識：グローバルコミュニケーション研究領域」において掲げている「グローバルな課題解決に必要な高度な専門知識」とは、「複雑化する世界で生じている現実の諸問題に向き合い、多言語・多文化共生社会の実現と持続に寄与するために、様々な学問と連携する学際的な特徴を有するコミュニケーション学の知見に基づき、異分野交流・融合・連携の中心となる、グローバルな課題解決に必要な複数の分野にわたる高度な専門的知識」のことを指し、本研究科が志向するグローバルな課題解決に必要な専門分野である、芸術学、異文化間コミュニケーション学、国際関係論、国際経済学、社会学、社会心理学、地域研究、ジェンダーのうちから複数の専門分野を修得することにより、「グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養、『文系』と『理系』の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力」を持つ人材を養成する。

「国際教養学における知」と「③専門的知識：グローバルコミュニケーション研究領域」において掲げている「グローバルな課題解決に必要な高度な専門知識」とは、別々のものではなく、同じテーマを別の視点から表現したものといえる。

しかし、当初の設置の趣旨等を記載した書類(本文)では、P.4「(3)設置の必要性」に「分野横断・学際的な教養学で修得する知とグローバル化とその課題に対する専門分野の知を統合し

た多層のかつ多元的な知」と記載していたため、教養学と専門分野の知が別の概念であるかの印象を与えたのではないかと思われる。従ってP. 4「(3) 設置の必要性」の上記の記載を「分野横断・学際的な、複数の専門分野の知を統合した多層のかつ多元的な知」と修正し、グローバルコミュニケーション研究領域で教授・研究する教養とは「教養学で修得する知と専門分野の知の統合」ではなく、「複数の専門分野の知の統合」であることを明確にした。なお、この「複数の専門分野の知の統合」はグローバルコミュニケーション研究領域に限ったことではなく、グローバルヘルスサービス研究領域においても同様である。さらにグローバルコミュニケーション研究領域とグローバルヘルスサービス研究領域の2つの研究領域の間においても、複数の学問分野を俯瞰できる能力をもって、人文・社会科学と自然科学・応用科学を横断的に学び、「複数の専門分野の知の統合」を行う。

また、人文・社会科学の領域をグローバルコミュニケーション研究領域としてまとめた背景には、「人文・社会科学と自然科学の両方の知識を持つ人材がネットワークの中心となり、様々な専門家を交流・融合・連携させ、共同作業を促進させる役割を担うことが期待されている」ことがあり、「様々な専門家との異分野交流・融合・連携の場を有効にする能力としてコミュニケーション力が欠かせないものとなる」ことから、この研究領域の象徴として名称をグローバルコミュニケーション研究領域としたとの説明を、設置の趣旨等を記載した書類（本文）の「(4) 養成する人材像と学位授与の方針」に追加した。さらに、医学と人文科学・社会科学との融合の一つの例として、「衛生学・公衆衛生学」に関する説明も追加した。

また、上記のことを踏まえて、養成する人材像についても、「多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げ、グローバル化のなかでも持続可能な社会を実現するために必要な知性・智恵・実践的能力（市民的教養）を身に付けた高度グローバル人材」としていたものを「グローバル化のなかでも持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養、「文系」と「理系」の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げることのできる高度で知的な素養のある人材」と改める。即ち「グローバル化のなかでも持続可能な社会を実現するために必要な知性・智恵・実践的能力（市民的教養）」とは、「分野横断・学際的な知識・教養、「文系」と「理系」の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力」であることを明確にした。同様に研究者養成も「分野横断・学際的な知識・教養、『文系』と『理系』の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、グローバルに関するさまざまな事象についての問題意識から研究テーマを設定し、先行研究を読み解くなかで適切な研究方法を選択し、必要な情報を収集・分析して、結論を導くことができる創造性豊かな研究・開発能力を持つ研究者を目指す人材」と改めた。

なお、本研究科の目的とするところは、「文系・理系」の両方を学ぶということではなく、「文系」と「理系」との「区別がない」ということ、「複数の分野を網羅」しているのではなく、「特定の学問分野」に依拠しないということである。これは時間的な制約があるなかで、専門細分化された学問を網羅的に学ぶことを目的とせず、複雑化した社会における諸問題を解決するためには、多様な専門家間の協働を運営し、情報や人的交流などの知的ネットワークのハブとなる人材が必要であること、「専門分野の枠を超えて共通に求められる知識や思考法などの知的な技法の獲得や、人間としての在り方や生き方に関する深い洞察」が必要であることを考慮に入れたものである。

## (2) 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

また、養成する人材像とディプロマ・ポリシーとは、養成する人材像の前半部分「グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養」とディプロマ・ポリシーの「知識と理解（DP1）」「知識と理解の活用（DP2）」が対応し、養成する人材像の後半部分「『文系』と『理系』の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げる」とディプロマ・ポリシーの「判断力（DP3）」「コミュニケーション力（DP4）」「自律的に学ぶ力（DP5）」が対応する。即ち、本研究科では、分野横断・学際的な複数の専門分野にわたる「知識と理解（DP1）」「知識と理解の活用（DP2）」を、「判断力（DP3）」「コミュニケーション力（DP4）」によって統合し、複数の学問分野を俯瞰できる能力をもって、生涯にわたり「自律的に学ぶ力（DP5）」を身に付けることを学生に対し期待するものである。

なお、養成する人材像とディプロマ・ポリシーとの整合性をより明確にするため、キー・コンピテンシーと学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）との関連性に関する説明を、設置の趣旨等を記載した書類（本文）の11ページに加えた。また、ディプロマ・ポリシーの知識と理解（DP1）に、普遍的な能力の例示として「論理性や批判的思考力、コミュニケーション能力、データ処理能力などの普遍的な能力」との文言を加え、DP2を「知識と理解の実践」から「知識と理解の活用」に修正した。このことにより、複数の専門分野の履修を通じてその活用法（知識と理解の活用：DP2）を学び、基盤科目であるリサーチリテラシー、研究方法論、研究指導科目である国際教養学特別研究において、複数の専門科目の知識を統合する知的な技法（判断力：DP3）の獲得を目指すものであることを明確にした。

また、ディプロマ・ポリシーにある「より高度な多文化・異文化に関する知識及び人類の文化、社会と自然」とは、「より高度な多文化・異文化に関する知識及び人類の文化」は人文学、「人類の社会」は社会科学、人類と自然は「自然科学」を指していたが、より分かり易くするため、人文学は「人間性」、社会科学は「人間の社会」、自然科学・応用科学は本学の特徴である医学・医療（看護・リハビリ等）・スポーツを表す「人間と生命」に置き換え改めた。

## (3) 設置の必要性

前述した(1)養成する人材像の対応において、設置の趣旨等を記載した書類（本文）のP.4「(3)設置の必要性」の上から12行目を「分野横断・学際的な、複数の専門分野の知を統合した多層的かつ多元的な知」と修正し、グローバルコミュニケーション研究領域で教授・研究する教養とは「教養学で修得する知と専門分野の知の統合」ではなく、「複数の専門分野の知の統合」であることを明確にしたこと、また、養成する人材像を、「グローバル化のなかでも持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養、『文系』と『理系』の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げることのできる高度で知的な素養のある人材」とし、その人材が持つ能力を「分野横断・学際的な知識・教養、『文系』と『理系』の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力」としたこと、(3)設置の必要性」の上記以外の箇所においても、必要な記載を追加し、不明瞭な部分を改めるなどの対応を行った。

新	旧
<p>設置の趣旨等を記載した書類（6 ページ）</p> <p><b>1 設置の趣旨及び必要性</b></p> <p>（4）養成する人材像と学位授与の方針</p> <p>ア 養成する人材像</p> <p>本研究科は、次に掲げる人材の<u>養成を行う。</u></p> <p>グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な<u>分野横断・学際的な知識・教養</u>、「文系」と「理系」の区別なく、<u>複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げることのできる高度で知的な素養のある人材</u></p> <p>また、博士課程の準備課程（研究者養成の第一段階）として、次に掲げる人材の養成も一部行う。</p> <p><u>分野横断・学際的な知識・教養</u>、「文系」と「理系」の区別なく、<u>複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、グローバルに関するさまざまな事象についての問題意識から研究テーマを設定し、先行研究を読み解くなかで適切な研究方法を選択し、必要な情報を収集・分析して、結論を導くことができる創造性豊かな研究・開発能力を持つ研究者を目指す人材</u></p> <p><u>（キー・コンピテンシー）</u></p> <p>本研究科において養成するこれらの人材が身に付けるべきキー・コンピテンシー（<u>主要能力</u>）は、「<u>知のプロフェッショナル</u>」が身に付けるべき能力として「<u>2040 年を見据えた大学院教育のあるべき姿 ～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～</u>（審</p>	<p>設置の趣旨等を記載した書類（5 ページ）</p> <p><b>1 設置の趣旨及び必要性</b></p> <p>（4）養成する人材像と学位授与の方針</p> <p>ア 養成する人材像</p> <p>本研究科は、<u>高い専門的知識とコミュニケーション力に基づいて、グローバル社会における保健医療を含む諸問題や持続可能な社会構築のための諸課題を分析し、国や地域を越えて他者と協議し、その解決に向けて貢献することのできる次に掲げる人材を養成する。</u></p> <p>①<u>多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げ、グローバル化のなかでも持続可能な社会を実現するために必要な知性・智恵・実践的能力（市民的教養）を身に付けた高度グローバル人材</u></p> <p>また、博士課程の準備課程（研究者養成の第一段階）として、次に掲げる人材の養成も一部行う。</p> <p>②<u>グローバルに関するさまざまな事象についての問題意識を持ち、その問題意識から研究テーマを設定し、先行研究を読み解くなかで適切な研究方法を選択し、必要な情報を収集・分析して、結論を導くことができる研究者</u></p> <p>本研究科において養成するこれらの人材が身に付けるべきキー・コンピテンシーは<u>次のとおりである。</u></p> <p>①<u>普遍的なスキル・リテラシー</u> ②<u>トランスファラブルな力</u></p>

議まとめ)」（中央教育審議会大学分科会，  
2019 年 1 月)において提示された次の能力  
(① 普遍的なスキル・リテラシーと②トラ  
ンスファラブルな力) とする。

(削除)

(① 普遍的なスキル・リテラシー)  
・論理性や批判的思考力

### ③専門的知識

これらの能力は，グローバル社会における多元的・複合的なリスクが持つ，高い不確実性に対応するためのものである。グローバル社会における多元的・複合的なリスクは，保険で移転することが可能な定量的な性質を持たず，高い不確実性があり，制御が困難である。リスクは国境を越えて拡散し，連鎖するから，他国の問題として解決を委ねるだけでは十分な対処ができない。国家間の協調が必要なのはもちろんのこと越境する企業・団体・個人に協力を得ることで国家では手が届かない問題に対処しリスクを抑え込む。この越境する個人，又は越境する企業・団体に所属する個人がグローバル人材のモデルであり，不確実・曖昧な環境下で，的確に物事を判断し，決定する能力を持つ。予測困難な状況で最適な意思決定を行うことが求められるこのグローバル人材は，「高度な専門的知識と倫理観を基礎に自ら考え行動し，新たな知を創り出し，その知から新たな価値を生み出して，既存の様々な枠を超えてグローバルに活躍できる人材(知のプロフェッショナル)」(「未来を牽引する大学院教育改革」(中央教育審議会大学分科会，2015年9月))と本質的に等しい。これら「知のプロフェッショナル」が身に付けるべき能力として「2040年を見据えた大学院教育のあるべき姿～社会を先導する人材の育成に向けた体質改善の方策～(審議まとめ)」(中央教育審議会大学分科会，2019年1月)において提示された次の能力は，本研究科に進学する前段階の学士課程で身に付け，修士課程において更に深化すべき能力と言える。

(① 普遍的なスキル・リテラシー)  
・論理性や批判的思考力

- ・広い視野
- ・コミュニケーション能力
- ・他者と共生する力
- ・創造力
- ・変化への適応力
- ・主体性と責任感を備えた行動力
- ・データ処理，活用能力

(②トランスファラブルな力)

- ・最先端の知にアクセスする能力
- ・自ら課題を発見し設定する力
- ・自ら仮説を構築し，検証する力
- ・社会的・経済的価値を判断・創出する能力
- ・高度な英語力を含むグローバル化に対応した優れたコミュニケーション能力
- ・倫理観
- ・マネジメント能力

これらトランスファラブルな基盤的な力を土台として，その上に複数の分野にわたる専門的知識を築いていく。この複数の分野にわたる専門的知識は，前掲の「審議まとめ」に示されているように「複雑化した社会における諸課題を様々な角度から理解し，解決する観点から，特定の狭い領域だけにとどまらないもの」とすべく本研究科においては次に掲げるように複数の専門分野から成る領域を設定する。

(③複数の分野にわたる専門的知識：グローバルコミュニケーション研究領域)

多言語，多文化が共存する今日の国際社会において，グローバルな規模での課題解決のためには，異なる文化的背景を持つ者同士のコミュニケーションが必須である。また，グローバル化の進展に伴い，政治体制の対立，貧富の拡大，内戦，移民・難民の発生，食料のアンバランス等，地球規模での課題に対する深い理解が求められている。グローバルコミュニケーション研究領域では，複雑化する

- ・広い視野
- ・コミュニケーション能力
- ・他者と共生する力
- ・創造力
- ・変化への適応力
- ・主体性と責任感を備えた行動力
- ・データ処理，活用能力

(略)

(②トランスファラブルな力)

- ・最先端の知にアクセスする能力
- ・自ら課題を発見し設定する力
- ・自ら仮説を構築し，検証する力
- ・社会的・経済的価値を判断・創出する能力
- ・高度な英語力を含むグローバル化に対応した優れたコミュニケーション能力
- ・倫理観
- ・マネジメント能力

これらトランスファラブルな基盤的な力を土台として，その上に高度な専門的知識を築いていく。この高度な専門的知識は，「審議まとめ」に示されているように「複雑化した社会における諸課題を様々な角度から理解し，解決する観点から，特定の狭い領域だけにとどまらないもの」とすべく本研究科においては次に掲げる領域を設定する。

(③専門的知識：グローバルコミュニケーション研究領域)

多言語，多文化が共存する今日の国際社会において，グローバルな規模での課題解決のためには，異なる文化的背景を持つ者同士のコミュニケーションが必須である。また，グローバル化の進展に伴い，政治体制の対立，貧富の拡大，内戦，移民・難民の発生，食料のアンバランス等，地球規模での課題に対する深い理解が求められている。グローバルコミュニケーション研究領域では，複雑化する世界で生じている現実



<p>世界で生じている現実の諸問題に向き合い、多言語・多文化共生社会の実現と持続に寄与するために、<u>様々な学問と連携する学際的な特徴を有するコミュニケーション学の知見に基づき、異分野交流・融合・連携の中心となる、グローバルな課題解決に必要な複数の分野にわたる高度な専門的知識を持った人材の育成を目指す。</u></p> <p><u>このグローバルコミュニケーション研究領域は、本研究科の基礎となる国際教養学部において、異文化コミュニケーション領域、グローバル社会領域として設定しているものであり、人文・社会科学領域の学問分野を扱う。具体的には、人文学の領域として芸術学、異文化間コミュニケーション学を、社会科学の領域として国際関係論、国際経済学、グローバル社会学、社会心理学を扱う。また、総合人文社会学として地域研究、ジェンダーを扱う。扱う専門分野の網羅性については、日本学術振興会の科学研究費助成事業の審査区分表の中区分における学問分野のうち、本学が考えるグローバルな課題解決に必要な分野をそれぞれ一つずつ選んだ形となっており（文学・言語学、歴史学、法学、教育学を除く）、必要十分な水準にあると思料される。なお、人文・社会科学の領域をグローバルコミュニケーション研究領域としてまとめた背景には、『『総合知』の基本的考え方及び戦略的に推進する方策〈中間とりまとめ〉（案）』（内閣府、2022年2月）のなかに、社会課題の複雑化、さらに情報爆発と知識の細分化・専門化が進み、単独あるいは少数の専門分野の知による課題解決はますます困難であり、社会と科学を結びつけるには、人文・社会科学と自然科学の融合による知を活用し、専門性、主体性を備えた個人がネットワークを作ることが必要との考えがある。つまり人文・社会科学と自然科学の両方の知識を持つ人材がネットワークの中心となり、様々な専門家を交流・融合・連携させ、共同</u></p>	<p>の諸問題に向き合い、多言語・多文化共生社会の実現と持続に寄与するために<u>グローバルコミュニケーションの学際的な知見に基づき主体的に判断し、グローバルな課題解決に必要な高度な専門的知識を持った人材の育成を目指す。</u></p> <p>(追加)</p>
--	--

作業を促進させる役割を担うことが期待されている。グローバルコミュニケーション研究領域が扱う学問分野はどれもグローバル社会の課題解決に必要であるが、様々な専門家との異分野交流・融合・連携の場を有効にする能力としてコミュニケーション力が欠かせないものとなるため、この研究領域の象徴として名称をグローバルコミュニケーション研究領域とした。

(③複数の分野にわたる専門的知識：グローバルヘルスサービス研究領域)

グローバルヘルスサービスとは、必要な医療（保健・看護・福祉を含む）が必要な患者に提供されるよう科学的な視点から医療サービスを評価するヘルスサービスリサーチ（Health Services Research）を地球規模の健康課題を扱うグローバルヘルス（Global Health）の領域まで拡張したものであり、2015年9月に国際連合総会で採択された持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）に掲げられている17の目標の3番目「すべての人に健康と福祉を（“GOOD HEALTH AND WELL-BEING”）」の実現を目指すものである。この研究領域では、パンデミックという地球規模の危機や人口の高齢化による疾病の多様化、非効率かつ不公正な保健システム等、現在のグローバル社会が抱える保健医療問題の解決を担うグローバルヘルス人材の育成を目指す。グローバルヘルスに関する分野では、医師、看護師等の医療専門職以外にも幅広い人材の育成が求められている。

このグローバルヘルスサービス研究領域では、健康・スポーツ科学、統計学、基礎医学、社会医学（公衆衛生・疫学）などの自然・応用科学系の学問分野を扱う。先述したグローバルコミュニケーション研究領域と合わせて、これら2つの研究領域は、グローバルという文脈においては複合的に関連している

(③専門的知識：グローバルヘルスサービス研究領域)

グローバルヘルスサービスとは、必要な医療（保健・看護・福祉を含む）が必要な患者に提供されるよう科学的な視点から医療サービスを評価するヘルスサービスリサーチ（Health Services Research）を地球規模の健康課題を扱うグローバルヘルス（Global Health）の領域まで拡張したものであり、2015年9月に国際連合総会で採択された持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）に掲げられている17の目標の3番目「すべての人に健康と福祉を（“GOOD HEALTH AND WELL-BEING”）」の実現を目指すものである。この研究領域では、パンデミックという地球規模の危機や人口の高齢化による疾病の多様化、非効率かつ不公正な保健システム等、現在のグローバル社会が抱える保健医療問題の解決を担うグローバルヘルス人材の育成を目指す。グローバルヘルスに関する分野では、医師、看護師等の医療専門職以外にも幅広い人材の育成が求められている。

上記に掲げたグローバルコミュニケーション研究領域は人文・社会科学系の学問分野を扱い、グローバルヘルスサービス研究領域は、健康・スポーツ科学、統計学、基礎医学、社会医学（公衆衛生・疫学）などの自然・応用科学系の学問分野を扱う。これら2つの研究領域は、グローバルという文脈においては

<p>ため、学生はそれぞれの研究領域を横断的に学ぶこととする。</p> <p>また、本学が、上記の2つの研究領域において、医学と人文科学・社会科学との融合を図る一つの意義として、次のことが挙げられる。</p> <p>「衛生学・公衆衛生学の将来展望—Japan Perspectives in Public Health—」（第19期日本学術会議予防医学研究連絡委員会，2005年8月29日）には、「衛生学・公衆衛生学が医学と人文科学，社会科学との融合を目指すのは，衛生学・公衆衛生学が，人間の個体，集団，そして生態系を研究の対象とし，健康を規定する要因として，環境要因，特に社会的，文化的環境要因を重視するからであり，研究成果を広義の予防に適用し，公衆衛生活動を実践するからである。」とある。国際保健（グローバルヘルス）は，国際社会の健康に関する課題解決に必要な，公衆衛生，疫学，医学，看護学などの医療分野の学問と，文化人類学，開発経済学，政治学，社会学などの人文・社会科学に属する学問を融合した学際・統合科学と言われる。近年は，健康・医療分野での国際協力において最も支援ニーズが高い人々（貧困層，女性，障害者，難民など）を対象としたプロジェクトにおいて，人文・社会科学系の非医療職（プロジェクトマネージャー，物資調達などを行うロジスティシャン，コンサルタントなど）の果たす役割が非常に大きくなっている。以上を考慮すると，医学部，看護学部などにおいて医療職を養成し，公衆衛生学・国際保健学に強みを持つ本学が，国際教養学部及び本申請において設置する国際教養学研究科において，分野横断・学際的な知識・教養を持ち，「文系」と「理系」の区別なく，複数の学問分野を俯瞰できる能力を持った高度で知的な素養のある人材を養成することの一つの意義として，</p>	<p>複合的に関連しているため，学生はそれぞれの研究領域を横断的に学ぶこととする。</p> <p>(追加)</p>
--	---

<p><u>これらの人材が国際協力の各プロジェクトにおいて、ネットワークの中心となり、様々な専門家を交流・融合・連携させ、共同作業を促進させる役割を担い、国際協力に貢献することが挙げられる。</u></p>	
---	--

設置の趣旨等を記載した書類（10ページ）

### 1 設置の趣旨及び必要性

（4）養成する人材像と学位授与の方針

イ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

本研究科は、グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養、「文系」と「理系」の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げることのできる高度で知的な素養のある人材及び分野横断・学際的な知識・教養、「文系」と「理系」の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、グローバルに関するさまざまな事象についての問題意識から研究テーマを設定し、先行研究を読み解くなかで適切な研究方法を選択し、必要な情報を収集・分析して、結論を導くことができる創造性豊かな研究・開発能力を持つ研究者を目指す人材を養成する。これらの人材が身に付けるべき知識・教養とは、画一化・規格化された専門分野の知ではなく、分野横断・学際的な専門分野の知を統合した多層的かつ多元的な知であると考える。この統合された知を生み出す基盤となる①普遍的なスキル・リテラシー、②トランスファラブルな力、並びに③グローバルコミュニケーション研究領域及びグローバルヘルスサービス研究領域における複数の学問分野にわたる高度な専門的知識を学生に修得させることを教育目標とする。

上記の人材養成上の目的と学生に修得させるべき能力等の教育目標に即した体系的なコースワークを履修し、修士論文又は特定の課題についての研究の成果の審査及び試験に合格し、所定の年限・単位数等を満たした者を、次に掲げる知識・能力を身につけたものと認め、修士（国際教養学）の学位を授与する。

・知識と理解（DP1）

設置の趣旨等を記載した書類（8ページ）

### 1 設置の趣旨及び必要性

（4）養成する人材像と学位授与の方針

イ 学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

本研究科は、グローバルかつ複合的な視点から国際社会の諸領域において新たな価値の創成を可能とする、知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材及び創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者を養成する。これらの人材が身に付けるべき国際教養学における知とは、分野横断・学際的な教養学で修得する知とグローバル化とその課題に対する専門分野の知を統合した多層的かつ多元的な知である。この統合された知を生み出す基盤となる①普遍的なスキル・リテラシー、②トランスファラブルな力、並びに③グローバルコミュニケーション研究領域及びグローバルヘルスサービス研究領域における高度な専門的知識を学生に修得させることを教育目標とする。上記の人材養成上の目的と学生に修得させるべき能力等の教育目標に即した体系的なコースワークを履修し、修士論文又は特定の課題についての研究の成果の審査及び試験に合格し、所定の年限・単位数等を満たした者を、次に掲げる知識・能力を身につけたものと認め、修士（国際教養学）の学位を授与する。

・知識と理解（DP1）

<p><u>論理性や批判的思考力，コミュニケーション能力，データ処理能力などの普遍的な能力を基盤とし，人間性，人間の社会及び人間と生命に関する高度な知識と理解を修得したことを示すことができる。</u></p> <p>・<b>知識と理解の活用（DP 2）</b> 自ら課題を発見し設定する力，自ら仮説を構築し検証する力，社会的・経済的価値を判断・創出する能力を基盤として，<u>人間性，人間の社会及び人間と生命に関する高度な知識と理解を活用することができる。</u></p> <p>・<b>判断力（DP 3）</b> グローバルリスクが持つ高い不確実性による制約を受けつつも，知識の活用に関する社会的・倫理的責任に配慮した情報に基づいて，異分野の知識を統合し，複雑性を処理し，自己の判断を導くことができる。</p> <p>・<b>コミュニケーション力（DP 4）</b> 多言語・多文化の環境下において，専門家及び非専門家に対して，結論とその根拠となる知識及び論理について，<u>わかりやすく明確に伝えることができる。</u></p> <p>・<b>自律的に学ぶ力（DP 5）</b> 複雑化・多様化するグローバル社会に対応するために，生涯にわたり自律的・自主的な形で学習を継続することができる。</p> <p><u>本研究科において養成する人材が身に付けるべきキー・コンピテンシーと学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）との関連性は，次のとおりである。</u></p> <p><u>知識と理解（DP 1）は，本研究科において養成する人材が身に付けるべきキー・コンピテンシーとして掲げた①普遍的なスキル・リテラシーを基盤とし，それを発展させた人</u></p>	<p><u>学士課程で培われた普遍的な能力を基盤とし，より高度な多文化・異文化に関する知識及び人類の文化，社会と自然に関する知識を修得し，理解することができる。</u></p> <p>・<b>知識と理解の実践（DP 2）</b> <u>国際教養学で体系的に身に付ける学際的かつ高度な専門知識を活用し，自ら課題を発見し設定する力，自ら仮説を構築し検証する力，社会的・経済的価値を判断・創出する能力を示すことができる。</u></p> <p>・<b>判断力（DP 3）</b> グローバルリスクが持つ高い不確実性による制約を受けつつも，知識の活用に関する社会的・倫理的責任に配慮した情報に基づいて，異分野の知識を統合し，複雑性を処理し，自己の判断を導くことができる。</p> <p>・<b>コミュニケーション力（DP 4）</b> 多言語・多文化の環境下において，専門家及び非専門家に対して，結論とその根拠となる知識及び論理について，<u>やさしい言葉で伝えることができる。</u></p> <p>・<b>自律的に学ぶ力（DP 5）</b> 複雑化・多様化するグローバル社会に対応するために，生涯にわたり自律的・自主的な形で学習を継続することができる。</p>
---	--

間性（人文学）、人間の社会（社会科学）及び人間と生命（自然科学・応用科学）に関する知識と理解を修得したことを示すよう学生に求めるものである。

知識と理解の活用（D P 2）は、本研究科において養成する人材が身に付けるべきキー・コンピテンシーとして掲げた②トランスファラブルな力を基盤とし、複数の学問分野にわたる専門的な知識と理解を活用することができることを学生に求めるものである。

判断力（D P 3）は、①普遍的なスキル・リテラシーと②トランスファラブルな力を基盤として、複数の異なる分野にわたる専門知識を統合し、複雑性を処理し、自己の判断を導くことができることを学生に求めるものである。

コミュニケーション力（D P 4）と自律的に学ぶ力（D P 5）は、①普遍的なスキル・リテラシーと②トランスファラブルな力を基盤として、複数の異なる分野にわたる専門知識を活用し、ネットワークの中心となり、様々な専門家を交流・融合・連携させ、共同作業を促進させる能力を学生に求めるものである。

上記に掲げた能力を持つ人材を本研究科では養成する。

設置の趣旨等を記載した書類（3ページ）

## 1 設置の趣旨及び必要性

### （3）設置の必要性

本学は、グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養、「文系」と「理系」の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げることのできる高度で知的な素養のある人材を養成するために本研究科を設置する。

具体的には、学士課程の4年間で培われた複数の学問分野を横断的に学ぶ教養教育の成果を引き継ぎ、本研究科においても人文・社会科学及び自然科学の領域からそれぞれ複数の専門分野を複合的に学ぶことで複眼的、水平的な思考・発想を身に付け、学問分野を俯瞰できる能力を修得する。複数の専門分野の修得を通じて、統合された多層かつ多元的な知を獲得するという教養教育の大きな特徴を人材養成に活かす。グローバル化された社会が持つ多元的・複合的な諸課題に取り組み、グローバル化による複合的な危機を乗り越え、持続可能な社会を実現するために必要な高度で知的な素養を持つ人材を養成する。

グローバル化された社会が抱える課題解決に必要な人材を求める社会的背景として、グローバル化による危機の連鎖がある。これらの危機は、世界がグローバル化に向かう過程で連続的に起こった。特にグローバル化の影響が世界中に行き渡った2000（平成12）年代以降では、2001（平成13）年9月のアメリカ同時多発テロ、2003（平成15）年のSARS（重症急性呼吸器症候群）、2004（平成16）年から2008（平成20）年にかけての原油価格高騰などの危機が起こり、2007（平成19）年から2010（平成22）年の世界金融危機で一旦はピークを迎える。2010（平成22）年4月の日本学術会議の提言「持続可能な世界の構築

設置の趣旨等を記載した書類（3ページ）

## 1 設置の趣旨及び必要性

### （3）設置の必要性

本学は、グローバル化された社会が抱える課題解決に必要な分野横断・学際的な知識・教養である国際教養学を教授し、知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材を養成するために本研究科を設置する。

具体的には、学士課程の4年間で培われた国際教養教育の成果を引き継ぎ、グローバル化に有用な専門知識の深化を図るための教育を修士課程で行う。国際教養教育及び専門知識の深化により、グローバル化による複合的な危機を乗り越え、持続可能な社会を実現するために必要な素養を持つグローバル人材を養成する。

グローバル人材を求める社会的背景として、グローバル化による危機の連鎖がある。これらの危機は、世界がグローバル化に向かう過程で連続的に起こった。特にグローバル化の影響が世界中に行き渡った2000（平成12）年代以降では、2001（平成13）年9月のアメリカ同時多発テロ、2003（平成15）年のSARS（重症急性呼吸器症候群）、2004（平成16）年から2008（平成20）年にかけての原油価格高騰などの危機が起こり、2007（平成19）年から2010（平成22）年の世界金融危機で一旦はピークを迎える。2010（平成22）年4月の日本学術会議の提言「持続可能な世界の構築のために」において、これらの危機は「グロ



のために」において、これらの危機は「グローバルリスク」として定義され、「金融・経済危機、地震・津波、甚大化する気象災害、感染症、テロといったように、最近の地域レベルから地球規模に至るリスクは、相互に関連しており、また局所的に突発して、それが急速（非線型的）に連鎖反応して時空間的に波及、伝播、グローバルに拡散していくといった様相が顕著」との特徴、すなわち「リスクの多元的・複合的な性格」が示された。これらの危機を国際協調により乗り越えて、各国が危機以前の状態に徐々に戻りつつある一方で、反グローバリズムの動きが2010（平成22）年代から顕在化し、いわゆる「グローバル化の巻き戻し」が現在まで続いている。反グローバリズムを支持する人々は、所得格差の拡大や環境破壊といった社会問題を発生させている要因は、ヒト・モノ・カネ・情報が国境を越えて移動するグローバル化にあるとし、この主張が政治的影響力を増していった。世界が保護主義化するなかで、2016（平成28）年に英国がEU離脱を表明し、2017（平成29）年には米国でトランプ政権が誕生、その政権が掲げた「米国第一主義」は社会の「分断化」を引き起こした。これらの新たな課題に対処しつつあるなかで、国際的な公衆衛生上の危機である新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的大流行）は起こり、さらにウクライナ戦争という地政学的危機、人道危機が続いている。現在進行中にあるこれらの危機はグローバルリスクの特徴である同時多発・複合危機としての性格を示しており、これらの危機が提示する課題を解決するためには、画一化・規格化された専門分野の知ではなく、分野横断・学際的な、複数の専門分野の知を統合した多層的かつ多元的な知が必要であると考える。

本学国際教養学部は、ヨーロッパ中世の自由7科（3科：文法・修辞学・論理学、4科：算数・幾何・天文・音楽）を起源とするリベ

ーバルリスク」として定義され、「金融・経済危機、地震・津波、甚大化する気象災害、感染症、テロといったように、最近の地域レベルから地球規模に至るリスクは、相互に関連しており、また局所的に突発して、それが急速（非線型的）に連鎖反応して時空間的に波及、伝播、グローバルに拡散していくといった様相が顕著」との特徴、すなわち「リスクの多元的・複合的な性格」が示された。これらの危機を国際協調により乗り越えて、各国が危機以前の状態に徐々に戻りつつある一方で、反グローバリズムの動きが2010（平成22）年代から顕在化し、いわゆる「グローバル化の巻き戻し」が現在まで続いている。反グローバリズムを支持する人々は、所得格差の拡大や環境破壊といった社会問題を発生させている要因は、ヒト・モノ・カネ・情報が国境を越えて移動するグローバル化にあるとし、この主張が政治的影響力を増していった。世界が保護主義化するなかで、2016（平成28）年に英国がEU離脱を表明し、2017（平成29）年には米国でトランプ政権が誕生、その政権が掲げた「米国第一主義」は社会の「分断化」を引き起こした。これらの新たな課題に対処しつつあるなかで、国際的な公衆衛生上の危機である新型コロナウイルス感染症のパンデミック（世界的大流行）は起こり、さらにウクライナ戦争という地政学的危機、人道危機が続いている。現在進行中にあるこれらの危機はグローバルリスクの特徴である同時多発・複合危機としての性格を示しており、これらの危機が提示する課題を解決するためには、画一化・規格化された専門分野の知ではなく、分野横断・学際的な教養学で修得する知とグローバル化とその課題に対する専門分野の知を統合した多層的かつ多元的な知が必要であると考える。

本学国際教養学部は、ヨーロッパ中世の自由7科（3科：文法・修辞学・論理学、4科：算数・幾何・天文・音楽）を起源とするリベ

ラル・アーツを、グローバルという文脈から再定義し、従来の一般教養教育を超えた学び、人文学、社会科学、自然科学を融合させた現代のリベラル・アーツ教育の実践のため 2015（平成27）年4月に開設された。学部における専門領域として設定した3つの領域（異文化コミュニケーション領域、グローバル社会領域、グローバルヘルスサービス領域）は、それぞれ人文学、社会科学、自然科学に対応し、これら複数の学問分野を横断的に学ぶことで従来の専門分野に分化した教育では難しい、複眼的、水平的な思考・発想を身に付けた人材、グローバル化時代に生きる市民的教養を持つ「グローバル市民（global citizenship）」を養成してきた。このグローバル人材を養成する学士課程では、「教養の形成とその形成を主目的とする教養教育は、一般教育に限定されるものでなく、専門教育も含めて、四年間の大学教育を通じて、さらには大学院での教育も含めて行われるもの」（「提言 21世紀の教養と教養教育」（日本学術会議，2010年4月））との理解の上に、四年間の大学教育に限定されない、大学院での教育に繋がる教養教育を提供し、他の大学院へ進学する学生の育成・輩出を行ってきた。このように本学部は、一般教育と専門教育の枠にとらわれず、複数の学問分野の学修を通じて現代社会が直面しているさまざまな問題や課題に適切に対応していくことのできる人材を養成し、このようなグローバル人材を求める社会の声に今まで応えてきた。しかし、他の大学院への人材提供のみならず、大学院を開設し、より高度なグローバル人材を自ら養成する意義は複合的な危機の広がりにより日々増しつつあると考える。

本研究科の設置は、現在進行中のグローバルで複合的な危機を乗り越えるために必要な教養教育を大学院レベルでの教育に伸長することで、より高度な課題解決能力を持つ

ラル・アーツを、グローバルという文脈から再定義し、その再定義されたリベラル・アーツを核とする教養教育を「国際教養教育」として提供することで、グローバル化時代に必要な市民的教養を持つ「グローバル市民（global citizenship）」を養成してきた。このグローバル市民を養成する教育課程において「教養の形成とその形成を主目的とする教養教育は、一般教育に限定されるものでなく、専門教育も含めて、四年間の大学教育を通じて、さらには大学院での教育も含めて行われるもの」（「提言 21世紀の教養と教養教育」（日本学術会議，2010年4月））との理解の上に、本学部は、リベラル・アーツの実践を修得するための専門教育として3つの領域（異文化コミュニケーション領域、グローバル社会領域、グローバルヘルスサービス領域）を設け、一般教育と専門教育の両方を通じて現代社会が直面しているさまざまな問題や課題に適切に対応していくことのできる人材を養成し、グローバル人材を求める社会の声に応えてきた。しかし、より高度なグローバル人材を求める声は、複合的な危機の広がりにより日々増しつつある。

本研究科の設置は、現在進行中のグローバルで複合的な危機を乗り越えるために必要な教養教育である国際教養教育を大学院レベルでの教育に伸長することで、より高度な

た人材を求める社会の声に応えるものである。グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養、「文系」と「理系」の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げることのできる高度で知的な素養のある人材は、より高度なグローバル人材として社会が求めるものであると考える。この証左として、企業によるグローバル人材の獲得需要は依然として旺盛であり、「経団連グローバル人材育成スカラシップ事業」などの様々な取り組みが継続して行われていることが挙げられる。また、「産業の高度化に伴い企業の採用においてもより高い専門性を重視する傾向となるなか、文理を問わず大学院教育も含めた学修成果と修得した能力を尊重した採用選考が定着」（「Society 5.0 に向けた大学教育と採用に関する考え方」（採用と大学教育の未来に関する産学協議会，2020年3月31日））とあり、「文系」と「理系」といった区分ではなく、多様なプロフェッションの高度専門職を求めるなかで、修士課程を修了した学生が有する能力・強みが認知されつつある。さらに科学技術・イノベーションの領域においては、2021（令和3）年3月26日に閣議決定された「科学技術・イノベーション基本計画」に、自然科学のみならず人文・社会科学も含めた多様な「知」の創造と、人文・社会科学の「知」と自然科学の「知」の融合による現存の社会全体の再設計、さらには、これらを担う人材育成が避けては通れないとあることから、本研究科が目指す「グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養、『文系』と『理系』の区分なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げることのできる高度で知的な素養のある人材」の

課題解決能力を持った人材を求める社会の声に応えるものである。この社会的要請への応答として、本研究科において、大学院レベルでのグローバル人材の養成を行う。企業によるグローバル人材の獲得需要は依然として旺盛であり、「経団連グローバル人材育成スカラシップ事業」などの様々な取り組みが継続して行われていることから、グローバル人材に対する産業界の期待の高さが窺われる。更に「産業の高度化に伴い企業の採用においてもより高い専門性を重視する傾向となるなか、文理を問わず大学院教育も含めた学修成果と修得した能力を尊重した採用選考が定着」（「Society 5.0 に向けた大学教育と採用に関する考え方」（採用と大学教育の未来に関する産学協議会，2020年3月31日））とあり、修士課程を修了した学生が有する能力・強みが認知されつつある。また、「働き手が自らの意思で、大学等での学び直しを通じて常にスキルや専門性を更新していくことが期待されており、リカレント教育の重要性が高まっている。」（提言「新しい時代に対応した大学教育改革の推進—主体的な学修を通じた多様な人材の育成に向けて—」（日本経済団体連合会，2022年1月））との提言からも、リカレント教育を含む社会人の学び直しの需要も依然として高いことが分かる。

必要性が分かる。

なお、修士課程を開設後、博士後期課程の開設も予定しており、分野横断・学際的な研究を行う研究者の養成も開始する。「大学院生は論文を完成させるため、研究活動のプロセス（(i) 問いを立てる、(ii) 文献レビュー、(iii) リサーチクエスション構築、(iv) リサーチ・デザイン、(v) データ収集と分析、(vi) 考察、(vii) アカデミックな貢献と限界）を経て、アカデミック・リサーチの訓練を積むことにより、鍛錬される能力・強みがあるとの指摘」（「産学協働による自律的なキャリア形成の推進」（採用と大学教育の未来に関する産学協議会，2022年4月18日））があり、研究実践力（研究をまとめる力・やり遂げる力）を持つ修士課程学生が産業界から評価を得つつある。また、「文理融合研究のあり方とその推進方策」（JST，2022年3月）を読むと文理融合研究を経験した研究者の数が限られていることが窺われ、研究者養成の第二段階としての博士後期課程へ繋がる人材として、教養学が扱う分野横断・学際的な研究を経験した修士課程学生は、非常に貴重であると思われる。特に「今や文理融合研究は、「やったら面白い」というレベルの話ではなく「マスト（must）である」（「報告 科学的知見の創出に資する可視化－文理融合研究と新パラダイム策定－」（日本学術会議，2020年9月））との報告もあり、この分野での研究者養成は喫緊の課題であることがわかる。

以上のように、グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養、『文系』と『理系』の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げることのできる高度で知的な素養のある人材を求める社会の需要に応えるため、本研究科を設置する。

なお、修士課程を開設後、博士後期課程も予定しており、分野横断・学際的な研究を行う研究者の養成も開始する。「大学院生は論文を完成させるため、研究活動のプロセス（(i) 問いを立てる、(ii) 文献レビュー、(iii) リサーチクエスション構築、(iv) リサーチ・デザイン、(v) データ収集と分析、(vi) 考察、(vii) アカデミックな貢献と限界）を経て、アカデミック・リサーチの訓練を積むことにより、鍛錬される能力・強みがあるとの指摘」（「産学協働による自律的なキャリア形成の推進」（採用と大学教育の未来に関する産学協議会，2022年4月18日））があり、研究実践力（研究をまとめる力・やり遂げる力）を持つ修士課程学生が産業界から評価を得つつある。また、「文理融合研究のあり方とその推進方策」（JST，2022年3月）を読むと文理融合研究を経験した研究者の数が限られていることが窺われ、研究者養成の第二段階としての博士後期課程へ繋がる人材として、教養学が扱う分野横断・学際的な研究を経験した修士課程学生は、非常に貴重であると思われる。特に「今や文理融合研究は、「やったら面白い」というレベルの話ではなく「マスト（must）である」（「報告 科学的知見の創出に資する可視化－文理融合研究と新パラダイム策定－」（日本学術会議，2020年9月））との報告もあり、この分野での研究者養成は喫緊の課題であることがわかる。

以上のように、分野横断・学際的な国際教養学を学生に提供し「文系・理系の枠を超えた知識・教養」とグローバルな視野を持った人材を求める社会の人材需要に応えるため、本研究科を設置する。

2. 審査意見1のとおり、ディプロマ・ポリシーの妥当性を判断することができないため、示されたカリキュラム・ポリシーが妥当なものであるのか判断することができない。このため、審査意見1の対応を踏まえ、養成する人材像及びディプロマ・ポリシーに整合したカリキュラム・ポリシーが適切に設定されていることを明確に説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

養成する人材像とディプロマ・ポリシーとは、養成する人材像の前半部分「グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養」とディプロマ・ポリシーの「知識と理解 (DP1)」「知識と理解の活用 (DP2)」が対応し、養成する人材像の後半部分「『文系』と『理系』の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げる」とディプロマ・ポリシーの「判断力 (DP3)」「コミュニケーション力 (DP4)」「自律的に学ぶ力 (DP5)」が対応している。

さらに、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーとは、「知識と理解 (DP1)」と「教養の再開発・再教育 (CP2)」とが関連し、「知識と理解の活用 (DP2)」と「専門知識の深化 (CP4)」とが関連している。「判断力 (DP3)」「コミュニケーション力 (DP4)」は「普遍的な技能の修得 (CP3)」と関連し、「自律的に学ぶ力 (DP5)」は「応用力の開発 (CP5)」と関連する。ディプロマ・ポリシーに掲げた能力は、基盤科目から専門科目、そして研究指導科目へと続く体系的編成 (CP1) をもって養う。以上のように養成する人材像とディプロマ・ポリシーに対して、カリキュラム・ポリシーは整合的であると考えます。

なお、養成する人材像を、「グローバル化のなかで持続可能な社会を実現するために必要な分野横断・学際的な知識・教養、『文系』と『理系』の区別なく、複数の学問分野を俯瞰できる能力を持ち、多様性と自他の違いを認め尊重しつつ、相互信頼と連帯・協働の輪を広げることのできる高度で知的な素養のある人材」と表現を変えたため、それに合わせてカリキュラム・ポリシーの体系的編成 (CP1) に「分野横断・学際的な専門分野の知を統合した多層的かつ多元的な知の修得、複数の学問分野を俯瞰できる能力の獲得を目指す」との文言を追加し、普遍的な技能の修得 (CP3) に「複数の学問分野を俯瞰できる能力の獲得に必要な普遍的なスキル・リテラシー」との文言を追加した。また、なるべく近い概念であれば同じ用語を使うように、汎用的技能の修得 (CP3) を、普遍的な技能の修得 (CP3) に改めた。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
設置の趣旨等を記載した書類 (16 ページ) <b>4 教育課程の編成の考え方及び特色</b> (2) 教育課程の編成方針 (カリキュラム・ポリシー) (略) ・体系的編成 (CP1)	設置の趣旨等を記載した書類 (14 ページ) <b>4 教育課程の編成の考え方及び特色</b> (2) 教育課程の編成方針 (カリキュラム・ポリシー) (略) ・体系的編成 (CP1)

分野横断・学際的な専門分野の知を統合した多層的かつ多元的な知の修得，複数の学問分野を俯瞰できる能力の獲得を目指すため，複数の異なる分野の科目を体系的に履修する。そのためにまず教養教育を中心とした基盤科目においてこれまでに獲得した知識と教養（知性・智恵・実践的能力）の再開発・再教育（リスクリング）を行い，複数の分野の専門科目においてそれらの知識と教養を学際的かつ高度な専門的知識と統合する。基盤科目と専門科目を履修するコースワークから確かな専門性を育む研究指導へと有機的に繋ぐ段階的かつ体系的なカリキュラムとする。

・**教養の再開発・再教育（CP2）**

大学院で身に付けることが期待される，自ら課題を発見し設定する力，自ら仮説を構築し検証する力，社会的・経済的価値を判断・創出する能力等の今後の社会を先導できる力，様々な場面で通用するトランスファラブルな力を修得するため，論理性や批判的思考力，コミュニケーション能力等の教養教育で身に付ける普遍的なスキル・リテラシーの再開発・再教育（リスクリング）を行う講義・演習を基盤科目に設ける。

・**普遍的な技能の修得（CP3）**

複数の学問分野を俯瞰できる能力の獲得に必要な普遍的なスキル・リテラシー，トランスファラブルな力を養うため，英語によるアカデミックリテラシー，数理・データサイエンス及びリサーチリテラシーの教育を行う。英語によるアカデミックリテラシーの教育は，アカデミック・リーディング，アカデミック・ライティング及びプレゼンテーションを核とする。数理・データサイエンスの教育は，正しく大量のデータを扱い，新たな価値を創造する能力を養う。リサーチリテラシーの教育は，最先端の知にアクセスする能力，自ら課題を発見し設定する力，自ら仮説を構築し検証する力，倫理観（研

国際教養学（グローバル化時代の分野横断・学際的な教養学）を複数の科目等を通じて体系的に履修するため，まず教養教育を中心とした基盤科目においてこれまでに獲得した知識と教養（知性・智恵・実践的能力）の再開発・再教育（リスクリング）を行い，専門科目においてそれらの知識と教養を学際的かつ高度な専門的知識と統合する。基盤科目と専門科目を履修するコースワークから確かな専門性を育む研究指導へと有機的に繋ぐ段階的かつ体系的なカリキュラムとする。

・**教養の再開発・再教育（CP2）**

論理性や批判的思考力，コミュニケーション能力等の普遍的なスキル・リテラシーの再開発・再教育（リスクリング）を行い，大学院で身に付けることが期待される，自ら課題を発見し仮説を構築・検証する力等の社会を先導する力，様々な場面で通用するトランスファラブルな力を修得させる講義・演習を基盤科目に設ける。

・**汎用的技能の修得（CP3）**

国際教養学における基盤的なリテラシーとして，英語によるアカデミックリテラシー，数理・データサイエンス及びリサーチリテラシーの教育を行う。英語によるアカデミックリテラシー教育は，アカデミック・リーディング，アカデミック・ライティング及びプレゼンテーションを核とする。数理・データサイエンスの教育は，正しく大量のデータを扱い，新たな価値を創造する能力を養う。リサーチリテラシーの教育は，最先端の知にアクセスする能力，自ら課題を発見し設定する力，自ら仮説を構築し検証する力，倫理観（研究倫理）を養う。

<p>究倫理)を養う。</p> <p>・専門知識の深化 (CP4)  専門科目において、人文・社会科学及び自然科学並びに応用科学の高度な専門知識を横断的に学ぶことで、学部段階からの知識の深化を図り、他分野に跨る知の活用から新しい発見や創造を導く先駆的事例とそのための方法論を修得する。</p> <p>・応用力の開発 (CP5)  修士論文又は特定の課題についての研究の成果を取り纏めることができるように研究指導教員及び研究指導補助教員による研究指導を行う。なお、研究者としてのキャリアを希望する者に対して、様々な研究手法(研究に必要なフィールドワークや文献調査のデザイン等)を修得することができるよう必要な科目を設ける。</p>	<p>・専門知識の深化 (CP4)  専門科目において、人文・社会科学及び自然科学並びに応用科学の高度な専門知識を横断的に学ぶことで、学部段階からの知識の深化を図り、他分野に跨る知の活用から新しい発見や創造を導く先駆的事例とそのための方法論を修得する。</p> <p>・応用力の開発 (CP5)  修士論文又は特定の課題についての研究の成果を取り纏めることができるように研究指導教員及び研究指導補助教員による研究指導を行う。なお、研究者としてのキャリアを希望する者に対して、様々な研究手法(研究に必要なフィールドワークや文献調査のデザイン等)を修得することができるよう必要な科目を設ける。</p>
--	--

(是正事項) 国際教養学研究科 国際教養学専攻 (M)

3. 審査意見2のとおり、本専攻が掲げるカリキュラム・ポリシーの妥当性に疑義があるため、適切な教育課程が編成されているか判断することができない。このため、審査意見1及び2の対応を踏まえた上で、適切な教育課程が編成されていることを明確にするとともに、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

本研究科のカリキュラム・ポリシーは、基盤科目から専門科目、そして研究指導科目へと続く体系的編成 (CP1) に基づいて、「複数の学問分野」を「俯瞰できる能力」を持った人材を養成することを基本的な方針としている。「俯瞰できる能力」の獲得には、複数の専門科目の知識を統合する基盤となる普遍的なスキル・リテラシーとトランスファラブルな力が必要であると考え、「教養の再開発・再教育 (CP2)」と「普遍的な技能の修得 (CP3)」を目的とした「グローバルコミュニケーション論」「グローバルヘルスサービス論」と「Advanced Academic Writing and Communication」「数理・データサイエンス概論演習」「リサーチリテラシー」を通じて普遍的なスキル・リテラシーとトランスファラブルな力を養う。その上で、複数の学問分野の学修を「地域研究特論」「Advanced Studies in Health and Sports Science」などの専門科目において行うことで「専門知識の深化 (CP4)」を図り、研究指導科目において「応用力の開発 (CP5)」を行うことで、「複数の学問分野」にわたる専門的な知識と理解を統合し「俯瞰できる能力」を獲得する。以上のように本研究科は、カリキュラム・ポリシーに従い、ディプロマ・ポリシーに掲げた能力の獲得に必要な授業科目を配置し、適切な教育課程が編成されていると考える。

なお、教養の再開発・再教育 (CP2) は、本研究科に進学する前段階の学士課程で身に付け、修士課程において更に深化すべき能力であり、普遍的なスキル・リテラシーの再開発・再教育 (リスキリング) に関係し、普遍的な技能の修得 (CP3) は、普遍的なスキル・リテラシーに加えて、すなわち学士課程教育の基礎の上に、大学院が育成すべき「知のプロフェッショナル」が共通的に身に付けるべきトランスファラブルな力を加えたものであることから、混同をさけるため記載を改めた。

さらに、体系的編成 (CP1) は、基盤科目、専門科目、研究指導科目へと有機的に繋ぐ教育課程の編成の全体的な方針であり、「Advanced Academic Writing and Communication」「数理・データサイエンス概論演習」「リサーチリテラシー」の編成に関わるため、先述した混同を避けることと併せて、この3つの科目に関するカリキュラム・ポリシーをCP2からCP1へと修正した。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
設置の趣旨等を記載した書類 (18ページ) <b>4 教育課程の編成の考え方及び特色</b> (3) 教育課程の編成と授業科目の展開 (略) <u>複数の学問分野を俯瞰できる能力を修得</u>	設置の趣旨等を記載した書類 (15ページ) <b>4 教育課程の編成の考え方及び特色</b> (3) 教育課程の編成と授業科目の展開 (略) <u>分野横断・学際的な教養学で修得するための</u>



<p>するための基盤となる知識・教養としての普遍的なスキル・リテラシーの再開発・再教育（リスキリング）を行い、複数の専門科目の修得へと繋がる科目として「グローバルコミュニケーション論」「グローバルヘルスサービス論」を設ける（CP1, CP2）。</p> <p>英語によるアカデミックリテラシー，数理・データサイエンス及びリサーチリテラシーの教育を行う科目として「Advanced Academic Writing and Communication」「数理・データサイエンス概論演習」「リサーチリテラシー」を設け，論理性や批判的思考力，コミュニケーション能力等の普遍的なスキル・リテラシー，最先端の知にアクセスする能力，自ら課題を発見し設定する力，自ら仮説を構築し検証する力，倫理観（研究倫理）などのトランスファラブルな力を養う（CP1, CP3）。</p>	<p>基盤となる知識・教養を修得する科目として「グローバルコミュニケーション論」「グローバルヘルスサービス論」を設ける（CP1, CP2）。</p> <p>英語によるアカデミックリテラシー，数理・データサイエンス及びリサーチリテラシーの教育を行う科目として「Advanced Academic Writing and Communication」「数理・データサイエンス概論演習」「リサーチリテラシー」を設け，論理性や批判的思考力，コミュニケーション能力等の普遍的なスキル・リテラシーの再開発・再教育（リスキリング）を行う（CP2, CP3）。</p>
---	--

(改善事項) 国際教養学研究科 国際教養学専攻 (M)

4. 設置の趣旨等を記載した書類(本文)の「(3) 教育課程の編成と授業科目への展開」において、「主として英語で講義を行う授業科目は、名称を英語表記とし、日本語表記を付記している。」と説明がなされているが、シラバスにおいて、授業内で使用する言語及び定期試験・レポートで使用する言語についての説明が見受けられず判然としない。「主として英語で講義を行う」とは授業において具体的に何を英語で行うかについて説明するとともに、学生が十分理解して履修を選択できるよう適切に改めること。

(対応)

「主として英語で講義を行う」ことの具体的な説明を設置の趣旨等を記載した書類に追加するとともに、学生が十分理解して履修を選択できるように、シラバスの「履修上の注意、履修要件」の箇所に、主として英語で講義を行う科目は、「この科目の主たる使用言語は英語です。授業中の使用言語を英語とし、提出課題やレポート試験も特段の指示がない限り英語で解答を求めます。」との注意書きを追加した。

#### ■資料1

修正後のシラバス例 (Advanced Academic Writing and Communication)

※「Advanced Studies in Gender」「Advanced Studies in Arts」「Advanced Studies in Intercultural Communication」「Advanced Studies in International Relations」「Advanced Studies in International Economics」「Advanced Studies in Global Sociology」「Advanced Studies in Health and Sports Science」「Advanced Studies in Basic Medicine」「Advanced Studies in Biostatistics」「Advanced Studies in Epidemiology and Preventive Medicine」「Advanced Studies in Global Health」のシラバスを同様に修正する。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
設置の趣旨等を記載した書類 (18ページ)	設置の趣旨等を記載した書類 (15ページ)
<b>4 教育課程の編成の考え方及び特色</b> (3) 教育課程の編成と授業科目の展開 本研究科は、前述の教育課程の編成方針に則り、複数の科目等を通じて <u>分野横断・学際的な知識・教養</u> を体系的に履修するため、基盤科目、専門科目、研究指導科目を設け、次のとおり授業科目を展開する。なお、文末の括弧内はそれぞれ対応するカリキュラム・ポリシー(CP)を示す。また、主として英語で講義を行う授業科目は、名称を英語表記とし、日本語表記を付記している。 <u>主として英語で講義を行うとは、授業中の使</u>	<b>4 教育課程の編成の考え方及び特色</b> (3) 教育課程の編成と授業科目の展開 本研究科は、前述の教育課程の編成方針に則り、複数の科目等を通じて <u>国際教養学</u> を体系的に履修するため、基盤科目、専門科目、研究指導科目を設け、次のとおり授業科目を展開する。なお、文末の括弧内はそれぞれ対応するカリキュラム・ポリシー(CP)を示す。また、主として英語で講義を行う授業科目は、名称を英語表記とし、日本語表記を付記している。

用言語を英語とし、提出課題、筆記試験やレポート試験も特段の指示がない限り英語で解答が求められるが、テキスト、参考文献で日本語によるものしか無いなどやむを得ない場合には、補助的又は限定的に日本語を用いることもあることをいう。グローバル化が進んだ昨今では、関連文献や資料などで英語による専門用語が使われる頻度が高くなっている。そのため本研究科では専門科目において英語による講義を行うことが必要と判断した。しかし、使用する文献や資料においては、日本語によるもののほうが明らかに授業目的に資するものがあるため、その使用を妨げることをないようにする。

(是正事項) 国際教養学研究科 国際教養学専攻 (M)

5. 教員資格審査において、「不可」や「保留」、「適格な職位・区分であれば可」となった授業科目について、当該授業科目を担当する教員を専任教員以外の教員で補充する場合には、当該授業科目の教育課程における位置付け等を明確にした上で、当該教員を後任として補充することの妥当性について説明すること。

(対応)

「Advanced Studies in Social Psychology (社会心理学特論)」を担当する教員が教員資格審査において、「不可」となったため、当該授業科目を日本語で講義を行う「社会心理学特論」とし、担当する教員として兼任の講師を補充する。

なお、この授業科目は教育上主要と認める授業科目ではなく、兼任の講師が担当することによる教育課程の編成上の影響は軽微である。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
設置の趣旨等を記載した書類 (19ページ) <b>4 教育課程の編成の考え方及び特色</b> (3) 教育課程の編成と授業科目の展開 (略) (専門科目: グローバルコミュニケーション研究領域) ・地域研究特論 ・Advanced Studies in Gender (ジェンダー特論) ・Advanced Studies in Arts (芸術学特論) ・Advanced Studies in Intercultural Communication (異文化間コミュニケーション特論) ・Advanced Studies in International Relations (国際関係論特論) ・Advanced Studies in International Economics (国際経済学特論) ・Advanced Studies in Global Sociology (グローバル社会学特論) ・ <u>社会心理学特論</u>	設置の趣旨等を記載した書類 (16ページ) <b>4 教育課程の編成の考え方及び特色</b> (3) 教育課程の編成と授業科目の展開 (略) (専門科目: グローバルコミュニケーション研究領域) ・地域研究特論 ・Advanced Studies in Gender (ジェンダー特論) ・Advanced Studies in Arts (芸術学特論) ・Advanced Studies in Intercultural Communication (異文化間コミュニケーション特論) ・Advanced Studies in International Relations (国際関係論特論) ・Advanced Studies in International Economics (国際経済学特論) ・Advanced Studies in Global Sociology (グローバル社会学特論) ・ <u>Advanced Studies in Social Psychology (社会心理学特論)</u>
設置の趣旨等を記載した書類 (28ページ) <b>10 教員組織の編成の考え方及び特色</b> (2) 教員組織	設置の趣旨等を記載した書類 (25ページ) <b>10 教員組織の編成の考え方及び特色</b> (2) 教員組織

<p>本研究科の教育課程の科目を担当する専任教員は15名であり、その保有学位は、博士14名、修士1名（博士課程単位取得退学）である。専任教員はいずれも十分な教育歴、研究歴を有している。</p> <p>完成年度となる令和8（2026）年3月31日時点での専任教員の年齢構成は、70歳代1名、60歳代3名、50歳代6名、40歳代5名となる。学校法人順天堂就業規則第32条第1項に「定年は満65歳とし、定年に達した日の年度末（3月31日）をもって退職とする。」と規定しているため、完成年度となる令和8（2026）年3月31日前に退職の年齢を超える専任教員は2名である。これらの教員に関して、本学「特任教員に関する規程」に基づき雇用を継続することとするため、教員組織の継続性に問題はないと考える。但し、後任となる教員の補充は計画的に行い教員組織の継続性に支障が生じないようにする。</p>	<p>本研究科の教育課程の科目を担当する専任教員は16名であり、その保有学位は、博士15名、修士1名（博士課程単位取得退学）である。専任教員はいずれも十分な教育歴、研究歴を有している。</p> <p>完成年度となる令和8（2026）年3月31日時点での専任教員の年齢構成は、70歳代1名、60歳代4名、50歳代6名、40歳代5名となる。学校法人順天堂就業規則第32条第1項に「定年は満65歳とし、定年に達した日の年度末（3月31日）をもって退職とする。」と規定しているため、完成年度となる令和8（2026）年3月31日前に退職の年齢を超える専任教員は2名である。これらの教員に関して、本学「特任教員に関する規程」に基づき雇用を継続することとするため、教員組織の継続性に問題はないと考える。但し、後任となる教員の補充は計画的に行い教員組織の継続性に支障が生じないようにする。</p>
--	--

(是正事項) 国際教養学研究科 国際教養学専攻 (M)

6. 改正前の大学設置基準第 36 条第 1 項で定める、専用の設備を備えた校舎を有するものとされる「学長室」について、校舎図面では備え付けられていることが確認できないことから、「学長室」が本学に備えられていることについて明確に説明するとともに、適切に改めること。ただし、特別の事情があり、かつ教育研究に支障がないと判断する場合には、当該事情や判断理由について説明すること。

(対応)

本学は、本郷・お茶の水キャンパスセンチュリータワー18階に「学長室」を配置しているが、「学長室」について「設置の趣旨等を記載した書類」の記述及び校舎図面における記載が漏れていたことから、文章の加筆を行い、平面図を追加した。

## ■資料 2

### 学長室図面

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>設置の趣旨等を記載した書類 (29 ページ)</p> <p><b>1 2 施設・設備等の整備計画</b></p> <p>(1) 校地、運動場の整備計画</p> <p>本研究科の教育・研究は、基礎となる学部である国際教養学部のある本郷・お茶の水キャンパスにおいて行う。本郷・お茶の水キャンパスは、JR 御茶ノ水駅と水道橋駅からそれぞれ徒歩 7 分とアクセスしやすい立地である。</p> <p>(2) 校舎等施設の整備計画</p> <p>講義や演習等については、本郷・お茶の水キャンパス第二教育棟、第三教育棟の既設の講義室や演習室等を利用する。本研究科の入学定員は 5 名であるため、少人数対応の講義室、演習室を利用する。本研究科の学生の自習室 (院生研究室) については、第三教育棟の 1 室を充て、机とパーソナルコンピューターを 12 席分 (予備 2 席) 用意する。</p> <p><u>なお、大学設置基準で定められている「学長室」は本郷・お茶の水キャンパスセンチュリータワー18階に整備している。</u></p>	<p>設置の趣旨等を記載した書類 (26 ページ)</p> <p><b>1 2 施設・設備等の整備計画</b></p> <p>(1) 校地、運動場の整備計画</p> <p>本研究科の教育・研究は、基礎となる学部である国際教養学部のある本郷・お茶の水キャンパスにおいて行う。本郷・お茶の水キャンパスは、JR 御茶ノ水駅と水道橋駅からそれぞれ徒歩 7 分とアクセスしやすい立地である。</p> <p>(2) 校舎等施設の整備計画</p> <p>講義や演習等については、本郷・お茶の水キャンパス第二教育棟、第三教育棟の既設の講義室や演習室等を利用する。本研究科の入学定員は 5 名であるため、少人数対応の講義室、演習室を利用する。本研究科の学生の自習室 (院生研究室) については、第三教育棟の 1 室を充て、机とパーソナルコンピューターを 12 席分 (予備 2 席) 用意する。</p>

(是正事項) 国際教養学研究科 国際教養学専攻 (M)

7. 本学の学則において、学校教育法施行規則第4条第1項第3号に規定する「授業日時数」について記載が見受けられないことから、適切に改めること。

(対応)

審査意見に従い、本学大学院学則について、授業日時数を次の通り規定する。

学則の改正

「第6条第8項 1年間の授業日時数は、各研究科において毎年度研究科長が定める。」

(新旧対照表) 大学院学則

新	旧
学則 (3 ページ)  ○ 順天堂大学大学院学則 (案) (略) 第6条 本大学院の修業年限は、次の通りとする。ただし、主科目担当教授又は研究指導教員を経て研究科長に願い出て学長の許可を得た場合には、次の通り在学年限を延長することができる。 (中略) 7 学年を次の学期に区分する。ただし、学長は本大学院において必要と認めるときは、各学期の始期及び終期を変更することができる。 8 <u>1年間の授業日時数は、各研究科において毎年度研究科長が定める。</u> (略)	学則 (3 ページ)  ○ 順天堂大学大学院学則 (案) (略) 第6条 本大学院の修業年限は、次の通りとする。ただし、主科目担当教授又は研究指導教員を経て研究科長に願い出て学長の許可を得た場合には、次の通り在学年限を延長することができる。 (中略) 7 学年を次の学期に区分する。ただし、学長は本大学院において必要と認めるときは、各学期の始期及び終期を変更することができる。 (略)

審査意見への対応を記載した書類（6月）（資料）

資料目次

【資料1】修正後のシラバス例-----2



科目名	Advanced Academic Writing and Communication	授業形態	演習
日本語科目名	アカデミックライティング&コミュニケーション	開講学期	前期
対象学年	1年次	単位数	2単位
代表教員	今井 純子	ナンバリング	GEL503
担当教員	今井 純子		
授業概要			
全体内容	<p>本科目は、国際教養学諸領域を専攻する大学院生が、修士課程の学びにおいて必要とされる、英語によるアカデミックライティングとプレゼンテーション能力、それらの基盤としてリサーチに必要な学術論文を探し、読む力（リテラシー）、を習得することを目的とした入門演習です。具体的には、グローバルコミュニケーション・ヘルスサービス研究領域における主な成果発表の種類（学会プロポーザル、研究発表、論文、ポスターなど）を知り、読み手・聞き手に向けて分かりやすく書き、発表する能力を養います。また、データ分析、インタビュー、エッセイ、発表を含むプロジェクトへの取り組みを通して、修士課程で求められる様々なジャンルの成果発表の作成過程を体験します。学期を通して、英語を使ってフォーマル・インフォーマルに書く・話す能力を高め、大学院で期待される自律したアカデミック・コミュニケーションを身につけます。</p>		
到達目標	<p>(1) 国際教養学諸研究領域で通例とされるアカデミック・コミュニケーションの種類・手段とその特徴を理解する  (2) 自身のライティング・プレゼンテーション能力を知り、大学院での研究に求められるコミュニケーション能力を伸ばす  (3) 演習やプロジェクトを通して学んだ情報を、自らの研究領域において必要とされる成果発表形式でアウトプットする</p>		
授業の位置づけ	基盤科目、必修科目		
ディプロマ・ポリシー、コンピテンシーとの関連	ディプロマ・ポリシーのうち、「知識と理解 (DP1)」「コミュニケーション力 (DP4)」「自律的に学ぶ力 (DP5)」に関連している。		
履修上の注意、履修要件	<ul style="list-style-type: none"> <li>各回のテーマについて指定された教科書の章、配布資料等は事前に読んでくること。</li> <li>プロジェクト課題に含まれるデータ収集・分析、エッセイ、発表の準備については、授業外で各自責任をもって取り組むことを基本とする。</li> <li>課題・宿題への取り組みを前提として、授業では、グループワーク、進捗報告、成果発表、相互評価、フィードバック等を行う。</li> <li>この科目の主たる使用言語は英語である。授業中の使用言語を</li> </ul>		

	英語とし、提出課題やレポート試験も特段の指示がない限り英語で解答を求める。
成績評価の方法	
評価方法	<p>下記の項目の得点状況に基づき評価する。3分の2以上の出席を評価の前提条件とし、欠席／遅刻は減点とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業参加度 (15%)</li> <li>・ 各回の事前・事後課題 (15%)</li> <li>・ プレゼンテーション&amp;ポスター発表 (20%)</li> <li>・ プロジェクト (Convention Analysis Projects) (30%)</li> <li>・ 期末レポート (20%)</li> </ul>
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 授業やテキスト、配布資料で紹介されるアカデミック・コミュニケーションやライティングの知識や言語表現を、各回の事前・事後に指定される Task を通じて積極的に使用する。</li> <li>・ Convention Analysis Project に含まれる一連の課題 (CAPs) を、履修者主体で実施し、完了させる。</li> <li>・ 本科目でのテキスト・配布資料を使った演習やプロジェクトの学びを通して、領域で期待される学術的なプレゼンテーション、論文の書き方、その他のコミュニケーション手段について理解を深め、成果発表に向けての学習プロセスを習慣化する。</li> <li>・ また、期末レポートやポスター発表を、修士課程で研究を始めるにあたっての指針作りと捉え、授業内での討議、グループワーク、成果発表の共有、相互評価を通じて、研究交流の擬似体験を行うことができる。</li> </ul>
試験・課題等に対するフィードバック方法	
課題へのフィードバックは、授業内で行うことを基本とし、適宜 Google Classroom も活用する。	
テキスト	
Swales, & Freak, C.B. (2012). <i>Academic writing for graduate students: Essential tasks and skills</i> . University of Michigan.	
参考文献	
Huang, L. (2010). <i>Academic communication skills: Conversation strategies for international graduate students</i> . University Press of America.	
Mallette, L. & Berger, C. (2011). <i>Writing for conferences: A handbook for graduate students and faculty</i> . Greenwood.	
<p>その他必要なプリント、リンク先等は授業内で配布、お知らせします。</p> <p>学術論文については、学術メディアセンターのデータベースをご活用ください。</p>	
その他	
連絡先・オフィスアワー	<p>連絡先：質問や面談のアポイントメントは、授業開講時限の前後の他、随時、電子メール (j-imai@juntendo.ac.jp) で受け付ける。</p>

		オフィスアワー：(木・金) 12：20～13：10		
担当教員の実務経験		なし		
備考		なし		
授業計画				
授業回	担当者	授業内容	授業方法※	予習・復習・レポート課題等と学習時間
1	今井 純子	<u>授業概要, 課題, 成績評価</u> について説明をする。各領域で主流とされる成果発表法(学術論文等)を明らかにするため, 本科目で取り組む Convention Analysis Project に含まれる6つの課題(CAPs)について, モデルサンプルの分析やワークを通して理解する。	演習, グループワーク	【予習】テキスト序章とシラバスを読んでおく(120分)。 【復習】ポイントをノートにまとめ, プロジェクトの実施計画を立てる(120分)。
2	今井 純子	<u>アカデミック・コミュニケーションの基本</u> (種類, 目的, 想定読者・聴者, 作成プロセス等)について, 例示されたサンプルの比較やこれまでの学習経験の振り返りを通して理解を深める。テキストの読解や内容についての討議, 演習問題を通して, ライティングの基礎を復習する。インフォーマル, フォーマル, ディスカッションで役に立つ表現を意識しながら, 実践する。	演習, 討議	【予習】テキストのUnit 1を読み, 事前に指定されたTaskをやっておく(120分)。 【復習】ポイントをノートにまとめ, 配布資料を再読する。指定されたTaskを提出する(120分)。
3	今井 純子	<u>学術文献の探し方・読み方・記録法</u> を学術メディアセンターでのワークを通して身につける。データベースを活用し, 研究に必要なアカデミック・リソースの入手方法について理解を深める。領域で同時履修する科目のシラバスやリーディングリストを分析し, 代表的なライティング・プレゼンテーション課題の種類や雑誌タイトルを知り, 自己の学術関心に添った論文を複数入手する。システムティックな読書記録法を身につける。	PBL	【予習】事前配布資料を読み, 学術メディアセンターを利用し, 事前指定されたTaskをやっておく(120分)。 【復習】ワークでの学びや発見を, CAPプロジェクト報告書1(CAP1)としてまとめる(120分)。
4	今井 純子	<u>要約の書き方</u> を復習し, 学術的なトーンを維持するための動詞・接続詞等のライティング表現や口頭でのサインポストを, 演習問題を通して身につける。	演習, 討議	【予習】テキストのUnit 5を読み, 事前に指定されたTaskをやっておく(120

		前週のワークで入手した学術論文を要約する。読んだ論文やこれまでの自分の研究(卒論等)について、情報カードにまとめ、要約を口頭で発表する。要約が必要とされるその他の場面(文献レビュー、アブストラクト等)について討議する。		分)。 【復習】要約した学術論文を再読し、CAPプロジェクトの報告書2(CAP2)としてまとめる(120分)。
5	今井 純子	<u>エキスパート・インタビュー</u> のため、指導教員または先輩院生に協力してもらい、第4週までの学び(学術メディアセンターのリソースを使ったワークやシラバス等の分析)や発見を確認する。各領域でのアカデミック・コミュニケーションで求められる知識やスキル、模範となる学術論文などについて追加のアドバイスを受け、理解を深める。	PBL	【予習】課題(CAP3)の指示を読み、インタビューでの質問事項を精査する(120分)。 【復習】インタビューで得たポイントをプロジェクトの報告書3(CAP3)としてまとめる(120分)。
6	今井 純子	<u>アカデミック・プレゼンテーション</u> を準備し、前週に行ったエキスパート・インタビューでの学びの成果について、口頭発表する。相互の発表にコメントし評価する。学会での研究発表などで必要な表現について討議する。	討議, 発表	【予習】発表スライドを準備する(120分)。 【復習】発表後の振り返りや他の発表から学んだ事をノートにまとめる(120分)。
7	今井 純子	<u>導入部や定義の書き方</u> を、演習問題を通して身につける。各自選定した模範学術論文の導入部(Introduction)や定義箇所について、本時での学びが当てはまるか、対象とする論文の構成や言語表現を分析し、検証する。	演習, PBL	【予習】テキストのUnit 2を読み、事前に指定されたTaskをやっておく(120分)。 【復習】学術論文の分析結果と役に立つ表現をプロジェクトの報告書4(CAP4-1)としてまとめる(120分)。
8	今井 純子	<u>問題提起, プロセス, 解決方法の書き方</u> を、演習問題を通して身につける。分析中の学術論文の方法論(Methodology)の書かれ方について、本時での学びが当てはまるか、対象とする論文の構成や言語表現を分析し、検	演習, PBL	【予習】テキストのUnit 3を読み、事前に指定されたTaskをやっておく(120分)。 【復習】学術論文の分

		証する。		析結果と役に立つ表現をプロジェクトの報告書 4 (CAP4-2)としてまとめる (120分)。
9	今井 純子	<u>データの説明や図表描写の書き方</u> を、演習問題を通して身につける。分析中の学术论文の結果報告箇所 (Results) について、本時での学びが当てはまるか、対象とする論文の構成や言語表現を分析し、検証する。	演習, PBL	【予習】テキストの Unit 4 を読み、事前に指定された Task をやっておく (120分)。 【復習】学术论文の分析結果と役に立つ表現をプロジェクトの報告書 4 (CAP4-3)としてまとめる (120分)。
10	今井 純子	<u>研究の条件, 批評・評価文の書き方</u> を、演習問題を通して身につける。分析中の学术论文の考察・結論箇所 (Discussion & Conclusion) について、本時での学びが当てはまるか、対象とする論文の構成や言語表現を分析し、検証する。	演習, PBL	【予習】テキストの Unit 6 を読み、事前に指定された Task をやっておく (120分)。 【復習】学术论文の分析結果と役に立つ表現をプロジェクトの報告書 4 (CAP4-4)としてまとめる (120分)。
11	今井 純子	<u>研究方法 (M) と結果 (R) の書き方</u> を、演習問題を通して身につける。CAP プロジェクトにおける一連の課題の実施方法と、これまでの分析結果 (CAP1~4) について、テキストが紹介する知識や言語表現を活用してまとめてみる。	演習, PBL	【予習】テキストの Unit 7 を読み、事前に指定された Task をやっておく (120分)。 【復習】授業のポイントをノートにまとめ、指定された Task を提出する (120分)。
12	今井 純子	<u>序論 (I) と考察・結論 (D) の書き方</u> を、演習問題を通して身につける。CAP プロジェクトにおける一連の課題 (CAP1~4) の紹介と、これまでの結果の評価や	演習, PBL	【予習】テキストの Unit 8 を読み、事前に指定された Task をやっておく (120

		振り返りを，テキストが紹介する知識や言語表現を活用してまとめてみる。		分)。 【復習】授業のポイントをノートにまとめ，指定された Task を提出する (120 分)。
13	今井 純子	<u>学术论文(IMRAD)形式</u> で，Convention Analysis Project の成果をまとめる。互いにフィードバックやコメントをし，論文を完成させる。	演習，グループワーク	【予習】前回までの授業内ワークを元に論文を草稿する (120 分)。 【復習】論文を修正し，提出する。(120 分)。
14	今井 純子	<u>ポスター作成と発表の基本</u> について，サンプルの分析をし，教員からの説明を受ける。前週までに IMRAD の学术论文 (ライティング) 形式でまとめたプロジェクトの成果を，ビジュアルとしてポスターにまとめ，口頭で効果的に発表する準備をする。	演習	【予習】事前配布資料を読みポスターの準備に取りかかる (120 分)。 【復習】ポスターを完成させ，印刷する (120 分)。
15	今井 純子	<u>ポスター発表</u> をし，学术论文や学会発表をする際の決まり事 (Academic Conventions) についての発見，本科目の学びの活用についての大学院で研究に取り組む上での今後の見通しを成果として共有する。発表の相互評価を行い，本科目での学びの総括をする。	討議，発表	【予習】発表のリハーサルをし，質問を予測する (120 分)。 【復習】本科目での学びや自他の発表を振り返り，感想や反省点をノートにまとめる (120 分)。

※ アクティブラーニングの要素を取り入れている場合，その内容を明記 (PBL, 反転授業, グループワーク, 討議, 発表等)